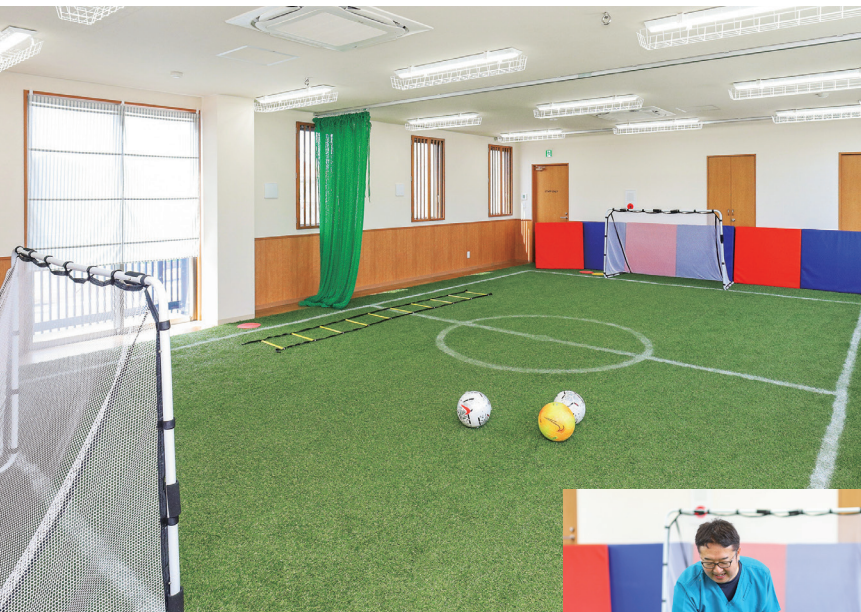




充実した1階のリハビリテーションルーム。病床のリハビリを引き継ぐことのできる体制を備え、利用者を受け入れている。



人工芝は材料をそらえて貼るところまですべてスタッフと一緒にこなったそう。「経費も抑えられましたし、自分たちでやったという思い入れは、モチベーションへの良い影響がありました」と話す。



あさのひ整形外科クリニック  
福岡県福岡市西区富士見2-14-7

Interview with  
Kanta  
Miyoshi

## 仲間とともに 育む地域医療

【後編】

開院10年を迎えるあさのひ整形外科クリニック。院名には「クリニック周辺に広がる豊かな自然と朝の太陽の前向きで元気なイメージを」という思いが込められている。昨年増床したリハビリ棟には、ADLを観察・再現できる浴室やキッチンスペースが設けられ、整形外科疾患に限らない幅広い治療に専念できる環境が整った。スタッフ育成の取り組みについて紹介した前編に続いて、後編ではリハビリテーションの現場について話を聞いた。

三好 敢太氏

あさのひ整形外科クリニック院長  
1998年 鹿児島大学医学部 卒

PROFILE

日本整形外科学会/日本足の外科学会/日本臨床スポーツ医学会所属

### 利用者の目線に立って支える

開院から10年、整形外科疾患に限定した設備から、2020年の増設を経て、弱点を克服する幅を拡げる。充実したリハビリ環境があらたな強みに加わった。マンパワーも整い、利用者がリハビリに専念できるサポート体制は万全となった。2階建てのリハビリ棟の1階部分には、ADLをチェックするための浴室、トイレ、台所がある。利用者は、まるで自宅と同じような環境で、日常生活の動作を再現できる。怪我や大きな問題点はないが、動作としてできなくなったという人たちの日常生活の質を確認し、レベルをあげてもらうことが一番の目的だ。

「診察の時に、いくら説明されて想像をしても、実際自宅をやってみると、思うようにいかないことはよくあります。自宅退院になると、再入院も難しいからと、諦める人が出てしまう」。三好氏は、リハビリの必要な人にとって、厳しい医療制度の状況が、回復の障壁となるケースを一人でも減らすために、充実した環境を目指してきた。

利用者へ、最初に必ず問いかける言葉がある。

「調子が良くなったらやってみよう、目標はありますか？」

旅行をしたい、運動を再開したい、散歩をしたい、家族のためにご飯を作ってあげたい。最初に伺う目標を希望に、この環境で実践的なりハビリテーションに取り組んでもらう。



リハビリ棟のキッチンスペース。住環境を再現した設備で、精度の高い実践的なりハビリができる。

台所でのリハビリは、動作確認をするだけでなく、自宅で料理を作るように実際に調理してもらうというから驚く。でき上がった食事は、スタッフも一緒にいただく。料理に必要な調味料や食材は、利用者スタッフが負担のない範囲の持ち寄りで作られているという。「ちょっとお節介のところもあるかもしれないけど、一緒にその方の立場に立って提案をするんです。そうすると達成できた時の喜びは、利用者と同じくらい、僕らにとっても嬉しいことなんです」。そうして利用者の望むことに焦点を合わせながら、少しずつできることを増やして生活の質を上げるサポートをする。

リハビリ棟の2階部分は、なんとワンフロアすべてが人工芝となっている。アスリート向けのリハビリ施設を完備することで、学生をはじめとする若い世代の多い地域の特性にも応えられる場所となった。この環境があれば、実際の競技に合わせた動作が再現できる。ボールを思い切り投げられることもできるし、走り込むことも可能。整形外科クリニックとリハビリテーション設備が同敷地内でここまで充実したかたちで二体化しているのは、全国でも稀であろう。

### 地域との協力関係を 強くしたい

三好氏は、整形外科のこれからの役割について、地域と連携した、医療機関外での関わりを強化することを意識している。話す。「現在進めているのは、九州大学と連携し、怪我の治療と活動量との相関性を見るという研究です。活動量計を患者さんにつけてもらい、統計データを分析しています」。

九州大学と連携した大規模なこの研究に、あさのひ整形外科クリニックの理学療

法士が研究生として参加している。高齢化が進めば、デイケアや医療機関に通えない人たちが増えることが予測される。その時に求められるのは、公民館や健康教室など、医療機関外の活動が充実することであろう。血圧を測ったり身体のチェックをしたり、基礎的な身体の機能管理ができる知識を、一人でも多くの市民が知っておく必要がある。三好氏は、そうした社会のあり方に備える取り組みとして、研究への貢献に惜しまず力を注いでいる。

「10年、20年先になるかもしれませんが、小学生、中学生の子どもたちが認知症サ

ポーターや、高齢者を支える担い手になってもらう教育の仕組みを考えていきたいですね」と三好氏は未来を見据えている。学校教育で認知症・介護について知る機会や、体験の機会をつくること。みんなが知識をもって、困っている人たちに手を差し伸べることであれば、それはすべての生活者にとって勇気を与えることになる。「地域との協力関係が必要となる時が必ずやってきます。そこに備えるために、私たちは、病院の外に出て、地域とのつながりを強くしていきたい」。

三好氏がたびたび口にした「チームは宝です。彼ら彼女らは本当にすごいんです」と、仲間を尊重する言葉が印象に残る。

10年前に三好氏が志したように、「自分もこざつたらやりたいことに打ち込めるかもしれない」と、一人またひとりと仲間が集まってきた。医療者として、しなやかな眼差しをもつチームは、地域の未来に差し込む朝の光のような存在になっていく。そんな希望に満ちていた。